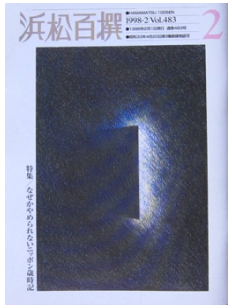
浜松百撰表紙

１９９８

青木鐵夫
画（色鉛筆）及び表紙のことば

ヒトとヒトがいて
間が生まれ
ヒトは人間になる。
間が悪かったり
間に合ったり
間のおかげで
喜怒哀楽に右往左往する。
面倒だけれど
人間だから仕方がない。
今年はどんな間を楽しむ
ことができるだろうか。



ドアにはふたつの意味合い
がある。ひとつは外界を
遮断し自分を守ってくれる
閉じられるものとしての
ドアである。もうひとつは、
自分を拘束し閉じ込めている
つまりは開けられねば
ならないドアである。しかし
これはドアの二面性であって
別のものではない。だから人は
ドアを開けたり閉めたりする。

人は歩みを止めることが
できない。何にせかされて
いるのだろう。
姿勢をみれば猫背で
遠くを眺めやる気持ちは
失せた。行き先を誰も
知らない。あのまま
止まって、むしろ怠惰に
身をまかせ朽ちるべき
だったと、思うときが
くるかも知れない。

落ちてくるものがある。
いったい何であろう。
わからないままに
落ちてくる。
明るく青く
空に雲ひとつない。
それでも次々
次々
落ちてくるものが
ある。

バラバラな記憶。
因果の輪からはずれた
カケラ。どう組み立ててもよいけれど、組み立てる
必要もない。そのひとつ
ひとつを並べてみる。
それは汚れた道路標識。
揺れている電線。
遮っていた柵。さらされた
白い杭。コップに酒を
注いで、いまは考えない。
記憶のカケラを肴に
ただ酔っている。

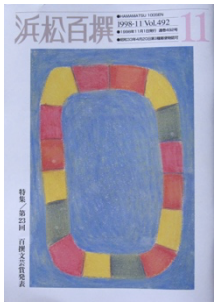
待ち人は姿を見せないが
かまいはしない。別に
急ぎの用事でもないのだ
から。それにまた、のん
びりと青い空なのだから。
ただ座っていればいい。
遠くになんとなく目を
やって、今朝からのことを
反芻している。心静かに
待っているというのはいい。

河原の石のように丸く
なってしまうと、上も下も
分からず、立っているのか
寝ているのか。人は直立
したことで人間になった
のだという。石のように
コロコロ転がっていては
イケナイらしい。
寝ているのに立っていると
欺くのも人間では難しい。
スッキリ立っている人を
街角で見つけると感心する。

アゴに手をやるのは自分を
ガードするのである。そう
でもしないと素っ裸でいる
ようで落ち着かないのだ。
自意識からの行動だが
実のところガードするほど
のものはないのである。
それでもついアゴに手を
やってしまうのは、ナンニモ
ないことを隠そうとする生存
本能的反射行動であろうか。

どこまでも連なっていて
いつ終わるかもしれないと
いう感覚は人をイライラ
させる。ものごとには
区切りというか終わりが
あって形になる。
人の生にしても死ぬことは
不安であるが、永遠に
生き続けるというイメージ
もあまりいただけない。
始めも終わりも定かでない
宇宙の概念は、小さかった
私を悩ませた。

もう随分長くたっている
ので、二本の街灯は疲れて
いた。頭が垂れてくるのを
どう仕様もない。もともと
どんな風に首を曲げていた
のか、今ではすっかり
忘れてしまった。それで
不都合があるわけでもない。
その時々それが自分の形で
あると、この頃お互い納得
している。真っ暗な夜です。



ぐるぐるまわるだけで
あがりのない双六。
ぐるぐる　ぐるぐる
ぐるぐる　ぐるぐる
何周まわったか
誰も知らない。どちらが先で
どちらが後かもうわからい。
勝負は忘れた。
並ぶとホッとする。
懐かしい気持ちになる　　。
仲間なのだ、と思う。

鏡をみつめる。
自分の立つ瀬はどこにある
のだろう。自答自問を
繰り返して、人は一人で
立っていないことに
気付く。他者との共存から
喜怒哀楽は生まれ
喜怒哀楽によって人は
他者とともに
日に日を継いでゆく。